

いま、若手音楽教員は
どのような課題に直面しているのか?!

教職歴1～10年程度の 教員に対するアンケートから 見えてくるもの

〔情報提供〕 山崎正彦(武蔵野音楽大学)
佐野 靖(東京藝術大学)

本稿は、平成22年10月16日、東京藝術大学で開催された「平成22年度全日本音楽教育研究会大学部会大会」で発表されたアンケート結果をもとに、調査を担当した山崎正彦と佐野靖が再構成したものである。

全日本音楽教育研究会大学部会では、音楽教員養成課程改善のための手掛かりを求めて、教職歴1～10年程度の音楽教員を対象をしぼり、アンケート調査を実施した。若手・中堅の音楽教員が、日常どのような点に悩みを抱え、課題意識をもっているのか、また、その悩みや課題をどのように克服しているのかなどについて、大学部会が学校現場の実践課題を共有する必要があると考えたからである。

結果、計160名の先生方から回答をいただいた。回答者の内訳は、小学校99名、中学校52名、高等学校8名、特別支援学校1名である。ご協力いただいた先生方に、あらためて深く感謝申し上げたい。

具体的な質問項目は、「音楽科の学習指導」として、「歌唱」「器楽」「音楽づくり・創作」「日本の伝統音楽」「鑑賞」、さらに「授業以外の音楽活動」として、「行事等とのかかわり」「部活動・課外活動」である。項目ごとに、「指導法」「教材」「自己の知識や技能、音楽経験にかかわること」「その他(評価等)」の事項を設け、特に問題や困難を感じている項目・事項を選択して、その内容についてすべて自由に記述する方法で実施した。

以下、各活動領域等における特徴的な内容ごとに主な意見を示しながら、今日的な課題を考察することにした。

執筆は、「歌唱」「器楽」「音楽づくり・創作」「日本の伝統音楽」を佐野、「鑑賞」「行事等とのかかわり」「部活動・課外活動」を山崎が担当する。



アンケート内容の文字使いは、
各回答の表記を基本的に使用しています。

1 歌唱の指導

(1) 歌唱への意欲・モチベーション、態勢・環境づくり

高学年になると「音がとれないこと」や「みんなの前でははずかしい」というような感じで歌わなくなる。「歌える」環境をどのように作ればよいかわからない。

(2) 練習や活動の状況、指導の言葉

指導をしている時の声かけの言葉がワンパターンになりがち。発声の方法や曲に合わせた具体的な指導の時、どのような言葉で表現すると伝わるのか、分からなくなって困っている。
...音とりがうまくできない。...カセットデッキで、部屋の四隅で、パートごとに練習をしている現状。...もっと専門的に教えたいが、音とりの声かけが中心になってしまっている、「音とりができたならその歌はできた」という生徒の意識につながってしまうのではないかと心配。

(3) 声にかかわる課題

歌う前に曲のイメージを子どもたちに話してから指導はするが、子どもたちは、大きな声を出すことに意欲をもってしまい、「きれいな声で」とかしずかな曲の時は、なかなか思うよう指導できない。
ポップス系の歌唱法を変えようとしないうちに生徒に対してクラシカルな発声の方がよい（通している）ことをどのように伝えたらよいのか。なまじカラオケなどで訓練されていて自信を持っている場合は特に。

(4) 子どもにふさわしい教材の選択・開発、共通教材の取り扱い

合唱教材で歌詞の内容の良いもの（生徒の思春期の心情に合い、歌詞の内容を考えて、自分の気持ちを深められるもの）は、混声四部の難しいものも多く、2年生や歌の不得意な学年のときの3年生で取り組む良い曲が中々なくて困る。特に合唱コンクールではクラス数分曲を準備しなければならないので。

(5) 評価・テスト

歌のテストをした結果を生徒につたえ「～が良かった」など評価を明確にしているがA・B・Cの「C」の生徒に対しては伝えにくい。聞きたい生徒だけが聞きにくる方法も取り入れたが「C」の生徒はもちろん聞きに来ないし、向上もしない。評価によって生徒が前向きになれる方法を教えてもらいたい。

(6) 教師の経験、知識・技能に関する課題、教職課程への提案

器楽科出身者にとって、大学の声楽授業ではドイツ・イタリア歌曲などあまりにも専門的な楽曲が多すぎる上、音程があっているかどうかの指導が多く、歌う時の姿勢や呼吸法などにはあまり触れられずに終わった。教職課程を履修する上で小学生でも歌える歌、分かんない方について勉強したかった。

歌唱の指導に関して、回答数が最も多かったのが「声にかかわる課題」である。小学校では、どんなような声で歌うことをあげる教員も多く、また、「声が頭の方に抜けてしまい、前に飛ばすことが難しい」などの回答も見られた。元気よく大きな声で歌うことを強調するあまりの弊害や、逆に、いわゆる頭声的発声のマイナス面が表れているといえよう。中学校では、やはり変声期の男子生徒への指導の難しさ、例えば「オクターブ上で歌うと、同じ高さで歌おうと一生懸命音を探ります。オクターブ下で歌うと、もっと低い音でがんばろうとしてしまい、うまく伝わりません」などの意見が寄せられている。

パート練習の仕方も歌唱指導の大きな課題である。とりわけ合唱コンクールが盛んな中学校では、「パートリーダーの育て方がわからない」など、効果的なパート練習の方法を求める声が多い。また、指導の際の言葉掛けのタイミングや豊かな言語表現など、教師側に言語的な能力が求められている。教材にかかわっては、題材における共通教材の扱い方の難しさ（小学校）どのパートも歌い甲斐のある合唱曲がとて少ない（中学校）などの指摘が印象的である。

評価やテストに関しては、「テストという形で1人または数人で歌わせるとはずかしさから声が出なくなってしまう。全体で歌っている中では一人ひとりの声を聴き取ることがむずかしい」という評価方法の課題や、どうしても教師の主観的な評価になりがちで、客観的な評価の難しさを問う声が多く寄せられている。

大学の教員養成に関する問題提起や提案としては、実際の指導に役立つレッスンや講義を望む声が多い。教職課程における実技関係のレッスン・講義のあり方を問い直す必要があることはいうまでもない。（文責：佐野）

2 器楽の指導

器楽指導に関しては、授業時間や楽器など様々な制約の中で、いかに効率よく指導を展開するかが大きな課題となっている。また、歌唱の際にも指摘されたが、ここでも教師の言語表現の豊かさが問われている。どの活動においても、「表現を工夫して」は頻繁に使用される指導言であるが、具体的な内容が示されず、ただ「工夫」が連呼されているケースも少なくない。何をどう工夫するのか、子どもにわかりやすく具体的に示すことは、器楽の学習指導に限らず、重要な課題である。

さらに、リコーダーなど一斉活動の中で個の状況や育ちを見取ることの難しさ、個別指導で他の子どもたちの練習をコントロールすることの難しさなどとともに、子どもの実態に合った教材の不足に対する声も寄せられている。例えば、難易度の極端なものも多く、少ない音でも達成感を味わえるような曲がもっと身近にほしいというものである。

教師自身の経験等にかかわっては、様々な楽器をどのように扱えばよいのかへのとまどいが多く見られる。特に、小学校段階では様々な打楽器の奏法や扱い方に関する知識が必要とされている。教員養成課程や教師教育の課題として受け止めたい。（文責：佐野）

(1) 合奏における諸課題～様々な制約（時間・楽器等）の中で～

合奏指導において楽器の数のバランスや調整の仕方、人数の振り分け方がわからない。
...グループでの合奏をする際「表現を工夫して」という時に自分自身の指導が未熟なため、工夫とはどういうことかを具体的に伝えられなくて困っている。

(2) 個人差への対応

リコーダーなど個人差が出やすいものの指導をする際、どうしても個別の指導がしきれない実態がある。T Tをやっていた頃はそれがスムーズに行うことができたが、教科指導も1人で担任を持っていると時間も取りにくく、どのようにしたらいいか模索中である。

(3) リコーダー指導

全員が初めて手に持ち、ゼロから同じような指導をしているリコーダーなのだが...授業が始まって三か月くらいで少しずつ差が出てきているのが気になる。また、他の学年の合奏では音を止めるルールを徹底しないと、説明が届かないほど音があふれかえってしまう。

(4) 子どもの実態に合った選曲・編曲

器楽指導の選曲は難しい。難しすぎても途中で生徒が挫折してしまう（やる気をなくしてしまう）だろうし、簡単すぎても達成感がもたない。ある程度演奏しやすいフレーズやリズム等の曲で、かつ、演奏するとそれなりの形になる曲を見つけるのはなかなか大変。また、演奏しやすいようにアレンジしたりもするので、そういう技術がある程度身につけているとやりやすいように感じる。

(5) 教師自身の経験、知識・技能の不足

...活動を通してねらいにせまる前に、様々な楽器の扱いでとまどいを感じている。自分の音楽経験とも深く関わっており、専攻以外のことも広く学んでおけばよかったと反省している。これは、課外で任せられる金管バンドについても言えること。
コードの知識や即興的な演奏技術がないので、なかなか生徒個々のニーズに対応できない。

3 音楽づくり・創作の指導

(1) この領域で身に付ける能力、目指すところ

年間35時間のなかで、どのような取り組み方があるのか。また、創作を行う上で、生徒たちに付けておきたい力(3年間で積み上げておきたいこと)にはどんなものがあるのか。自分自身も勉強したいのですが、どの程度まで、できればいいのか生徒に力として付けられるのかよくわかりません。

(2) 指導のプロセス、活動の発展性

音遊びやリズム遊びどまりで、音から音楽へ構成するための段階的な指導法・手だてがわからない。
リズムづくり、旋律づくりの経験が少ない生徒達に限られた時間で作品作りをするのが難しい。音符・休符の基礎・基本から記譜できるようになるまでの(生徒が思うリズムを自分で記譜できるようにするのは時間がかかる)過程の指導が難しいと感じる。

(3) 評価

時間があまりとれない創作は作品の評価よりもほとんど取り組み方にかたよってしまう。又、仕上がった作品について自分なりの評価をするのに自信がもてない。
グループで作品を創作することが多いが、一人一人の評価を適切に行う方法がわからず、模索中。

(4) 記譜・読譜

生徒は大変関心を持っていることを常々感じているが、実際に曲として完成させることの難しさを感じている。「楽譜を書く」という点にはどこまでこだわればよいのか悩んでいる。

(5) 教師自身の経験不足、大学と実践のギャップ

大学の時に音楽づくりについて勉強する機会があったので現場で試してみたが、児童の実態や経験によってできあがるものが違うことが多くあり、指導法に関して悩んでいる。教材についても選択が難しい。
自分自身がこうした学習を経験しておらず、大学でも具体的な指導法を勉強しなかったもので、どのように題材を設定しようか悩むことが多い。

歌唱、器楽、鑑賞と比較して顕著なのは、教師自身の経験不足、ならびに大学における学習と実践とのギャップ等について多数の回答(24件)が寄せられている点である。教員養成の段階で身に付けておきたい基礎・基本は何なのか、また実践経験の中で方法論を発展させていくために何が必要なのかなど、音楽科の教師教育全体にかかわる焦眉の課題と受け止める必要がある。

限られた時間数の中で、活動をどう発展させていくかも大きな実践課題である。具体的には、「単に音を並べただけのものやリズムパターンを適当に並べただけのもの」で終わってしまうことへの懸念や、個やグループでつくったものをクラス全体として広げていくことの難しさなどである。

評価に関しては、取り組み方に偏ってしまうことに課題を感じている教師がいる一方で、作品の評価になりかねないところに課題を感じている教師も少なくない。また、どのような点で工夫されている、されていないと評価するのか、観点が定まっていないとの指摘もある。つくろうとする意図は明確であるが、それを演奏や楽譜にうまく表せない子ども、うまく楽譜等に記すことはできるが演奏で表現することは苦手な子どもなど、一人一人の能力の出方が異なる状況での評価はとても難しい。実践者と研究者らが連携した実践研究が望まれる。
(文責：佐野)

4 日本の伝統音楽の指導

回 答者160名のうち104名が、「日本の伝統音楽の指導」の項目・事項を課題として取り上げている。その多くが、教師自身の経験や知識・技能の不足に端を発するもので、そこに楽器や予算、教材の不足などが重なり、指導に対する抵抗感や自信のなさ、指導法の硬直化などの悪循環を招いていると察せられる。

箏を中心に和楽器に関しては、何らかの形で大学において経験できる状況が整ってきているように思われるが、伝統的な歌唱に関しては、まだ学習環境がそれほど整備されていない状況がある。教師自身、「発声やコブシ」などができない、民謡を歌わせたいが自分が歌えないなどの回答が寄せられている。さらに、和楽器の手配や準備に関する事情も深刻である。「拠点校にある和楽器を運ぶための運搬費」の負担は、現場の切なる声である。

指導法に対する自信のなさや指導プロセスの硬直化は、もちろん教師の経験不足に起因するものであるが、教科書の内容に関しても問題が指摘されている。具体的には、小・中学校での教材選択の問題や、歌舞伎・文楽などにかかわる内容の不十分さである。

子どもと伝統音楽との距離感については、和太鼓が子どもの身体に根付いているという意見がある一方で、「アップテンポの曲に慣れている児童なので、なかなか難しい」との指摘もある。最初は子どもが興味・関心を示しても、それを継続できないという背景には、やはり教師側の教材研究不足や、教師自身が伝統音楽のもつ魅力を実感できていない状況があると考えられる。

こうした状況を克服すべく、自身で和楽器を習う機会を求めている教師は少なくない。教職課程での学習を充実させることはいうまでもないが、地域と連携して、現職教師の学習にも協力していくことが大学に求められている。
(文責：佐野)

(1) 教師自身の経験や知識・技能等の不足、楽器・予算等の不足

何をどうしたらいいのかわからない。興味もたせ方、奏法など。大学では箏は触れたが他の楽器はない。楽器の手配、準備に関しても困っている。
自分自身に十分な経験がなく、...生徒に達成感や成就感をもたせられるかとても不安である。

(2) 指導の硬直化・発展性のなさ

和楽器経験がないので、箏の授業をしているものの、パターン化してしまい、いまいち発展しない。

(3) 教科書や教材に関する課題

自分の経験が乏しいが教員になって学んだりして、演奏する機会を持ったことで若干の自信がついた。箏に関しては一通りの実践を行ってきたが、他の分野へ広げたい。また、歌舞伎や文楽などをしっかりと取り組みたいが教科書の内容も不十分ではないかと感じている。

(4) 子どもと伝統音楽との距離感

日本ばい、昔みたい、聴いたことがあると始めのうちは関心を持つが、難しい。歌い辛いとその意欲が継続できない。

(5) 大学時代の活動体験、学ぶ機会を!

大学時代で触れた伝統楽器が箏だけなので、笛がなかなか取り組めない。現校は箏も5面しかなく、生徒にいきわたらず、練習がはかどらない。
前任校は、三味線、現在は箏があるが、大学で少し学んだ程度なので指導するには経験がなさ過ぎる。独学で勉強して指導するには専門的過ぎるので実際に経験をつまないと難しい。プライベートで習いに行っていたが時間や金銭的にも厳しい。

5 鑑賞の指導

(1) 教材の選択、教材の活用、教材の開発について

鑑賞教材の不足が課題。なかなか指導にあった適切な教材が提供できていない。幅広い教材選びが難しい。
鑑賞教材について、教科書に載っている楽曲以外のものを取り上げたいが、選択の視点、教育課程との関連性、教材として考える時の留意点が明確に定まらない。

(2) 評価について

評価について、鑑賞文の評価をする際、どうしても書く力のある生徒の評価が高くなってしまい、もしかすると聴き取ることができているのに文章にできていない生徒がいるのではないかと心配になる。
評価を批評文で行っているが、これを書かせるのが難しい。(生徒の語彙が足りない)

(3) 感想を書かせるだけの授業

指導というよりCDを聞かせてプリントに感じたことを書かせて、終わりにしてしまう。

(4) 表現と鑑賞の関連についての課題

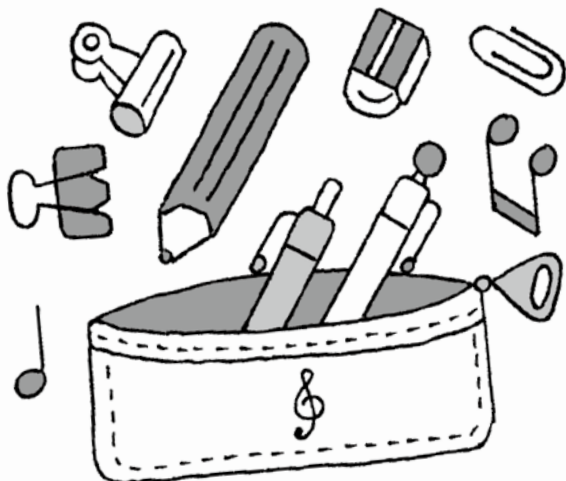
鑑賞で扱った曲については児童はよく学習してくれるが、そこで学んだ音楽の要素を他の歌や楽器の演奏などの表現に生かしつつ、次につなげるような指導ができていない。

(5) 教師の経験、知識・技能に関する課題

作曲家、曲の背景、その時代の様子などを自分が詳しく知らないことも多く、十分に作品のよさを伝えられない。
題材と教材の不適合を感じても、それに変わる教材を持ってくる知識もないため、困っている。

(6) 発問についての課題

楽曲の中で感じ取らせたいことをどう導き出すか、どのような発問で引き出せばいいのか分からない。



やまざき・まさひこ

武蔵野音楽大学教育学科講師

さの・やすし

東京藝術大学教授

表に挙げた問題点のいくつかに焦点をあててみたい。以下の3点は小学校、中学校に共通するものである。

1. 有効な鑑賞教材が少なくて困っている。(教材)
2. 音楽を聴かせて感想を書くだけになっている。(授業)
3. 感想文の評価では文章力のある生徒の評価が高くなってしまっている。(評価)

2は特に注目すべきで、鑑賞指導における課題意識として今も昔も変わらない。このことは当然、3のような学習評価に関わる課題意識も引き出すことになる。

1であるが、仮に児童生徒が好む教材が少ないという意味なら鑑賞指導の本質が誤解されている可能性もある。鑑賞指導においてまずすべきことは、楽曲を特徴付けている要素に目を向け、それを焦点化して聴かせるような指導ではないだろうか。例えば、児童生徒がそれまで聴き取れなかった音や音色が聴き取れるように、楽曲の聴きどころを意識して聴取させること。そして、聴き取れたものが何であるのかを音楽的な要素として確実に理解させることである。さらには、ある楽曲から感じ取れたことが、どの音楽的な要素によるものなのかを考え、もう一度、あるいは繰り返し音や音楽を聴いてそれを確認することが最終的なおさえどころである。

これらの経験を積むことで、音楽を聴き味わうということを経験に児童生徒に実感させることが可能となり、鑑賞の能力にも迫って行くものと考えられる。よって、鑑賞指導では児童生徒がその楽曲を好むかどうかでなく、何より楽曲のもっている特徴が何であるのかを見出すことが重要である。そして何かが見出せたのなら、それが児童生徒にとって学ぶ価値があるものなのかどうかを見定めることも不可欠となる。これらに見通しがつけば、その楽曲は立派な教材であり、児童生徒がその楽曲を好む、好まないにかかわらず、彼らにそれを教材として提示することが出来る。

とは言え、児童生徒の好みは授業態度とも密接に関わるがゆえに軽視出来ない。そこで彼らを引き付ける鍵として、やはり指導方法である。その意味で、調査回答の「楽曲から感じ取らせたいことをどう導き出すか、どのような発問で引き出せばよいのか」という課題意識は、今後の鑑賞指導の改善につながる大切な一言である。楽曲のもつ特徴に自然と目を向けさせ、例えば「この不思議な音は何?」「どのように演奏しているのかな?」というような問いを児童生徒に抱かせるきっかけが発問と考えているのなら、まさにその通りと言えるからである。

自らの視点で楽曲の特徴を焦点化して教材性を見定める。児童生徒の興味や関心を引き出すように発問を工夫する。このような鑑賞指導では楽曲を聴いて感想を書くだけという事態は生じ辛いはずである。さらには、みとるべきは文章力ではなく、楽曲からきちんと要素を聴き取っているか。楽曲から感じ取ったことを聴き取った要素と重ね合わせて述べる事が出来るか。評価観もこのように転換するはずである。

これらのことを教職課程に還元するなら、やはり学ぶための音楽鑑賞という、音楽鑑賞指導の本質を学生に理解させることや、教材、発問、評価のすべてが相互に関わり合う指導方法のあり方を理論的、すなわち誰が指導しても同じような効果が得られるものとして理解させることが責務と考える。

(文責：山崎)

6 行事等とのかかわり

小学校・中学校共通

(1) 行事の取組における他の教員（担任等）との関わりについて

どの程度、担任や他の先生の力を借りてよいものかわからない。
クラス担任、行事担当の先生との関わり方を知りたい。

(2) 企画・運営力について

授業の作り方は学んできたが、音楽科は音楽会などの行事の企画も行う場合もありうる
ので企画の方法を教えてほしい。

小学校のみ

(3) 行事（音楽会等）に関する課題

音楽会に3、4年で出場する予定となっているが器楽合奏の練習時間の確保が難しい。音
楽の得意な子と苦手な子がいて、学年による差もあるので活動が限られてくる。他に音楽
専科がいないので担任の先生と授業を交代するなどして指導している。

(4) 音楽集会に関する課題

全校集会や行事での全員合唱、全員合奏の指導法に困っている。

中学校のみ

(5) 行事（合唱コンクール等）に関する課題

合唱コンクールの時期になると合唱ばかりの指導になり、他の領域の評価材料が少なくな
り、どうしても偏った評価になってしまう。

これは小学校における音楽集会などの学校行事、中学校
の合唱コンクールについての問題点を問うたものである。
小学校、中学校共に、行事の取り組みにおける他の教員との
関わりについてと、企画・運営力の2点が課題として数多く
挙げられている。

前者は、まさに教員間のコミュニケーションの問題であり、
仕事の分担や依頼の仕方に悩む実情が伝わってくる。後者で
は、赴任後直ぐに学校行事の企画や運営を任される立場とな
ることへの戸惑いと、その負担の大きさや重圧感が挙げられ
ている。

また、小学校からは、大学で学ばなかった全校集会や行事
での全校合唱、合奏の指導方法に困っているという声が数多
く寄せられ、中学校からは、合唱コンクールが長期に及ぶの
で評価が偏るというような、音楽科の授業のあり方にも関わ
る課題意識が数多く報告されている。（文責：山崎）

7 部活動・課外活動

小 学校から中学、高等学校に共通するものとして、自らの専
攻以外の実技指導に関する課題と、部の運営に関する課題
の2点が数多く挙げられている。

前者は、マーチングと吹奏楽の指導に関するものがほとんどで、
迷いながら確信をもてずに指導を行っている実態が語られている。
後者からは、指導者に展望があっても従来からの体制や指導方法
が変え辛い現実と焦りとが伝わってくる。

また、小、中学校共通の課題としては時間的制約、他の教員の
理解と協力、保護者との関わりなどの3点が挙げられている。なかで
も時間的制約については、部活動の指導により授業準備もままな
らないという状況が伝えられ、回答者の多くが初任や赴任して数
年目ということを考えると、その最も大切な時期に授業研究も満
足に出来ない深刻な事態に直面していることが分かった。保護者
との関わりについても、述べたような回答者の年齢だと年長の保
護者との関係が心理的ストレスとなっていることも推測できる。

これらの他、中学校のみに見られる課題として指揮法が多数挙
げられ、「楽団相手に指揮法を学ぶ経験があればよかった」とい
うように、大学の教職課程に向けての直接的な意見も見られた。

この授業以外の音楽活動と部活動・課外活動に関する課題の多
くは、共通する問題点に起因しており、それが音楽科教員の一人
配置である。多くの学校において音楽科教員が一人のため、授業、
学校行事、部活動のすべてを一人で行わねばならず、何か不明な
点が生じても一人でそれを解決することになる。担うべき業務も
多いことから、当然、長時間業務に追われ「休日も取れず、授業
の準備もできない」という切実なコメントも見られる。

教職課程においては、これらのことをふまえ、学校現場の状況
を学生に伝えることと、その状況を実体験するための実習機会等
の確保についてこれまで以上に努め、可能な限りそれを具現化す
ることが求められていると言える。（文責：山崎）

小学校・中学校・高等学校共通

(1) 専攻以外の実技指導に関する課題

自分にマーチングや金管楽器の経験がないので指導の方法が分からず、迷いながら
やっている。自分でやったことがないので技術的な指導ができず困っている。
吹奏楽の経験があまりないので、楽曲全体のアドバイスはできるが楽器の吹き方や
初心者への指導はなかなかできない。今はなんとかなりたってはいるが、レベルア
ップさせたいので吹奏楽指導者を（大学から）派遣していただきたい。

(2) 運営・部の経営に関する課題

活動が勤務時間外のため、担当する先生の考え次第になっている。時間と活動内
容の充実の兼ね合いが難しい。
これまでの部活の経験（やり方）があり、なかなか体制がかえられない。

小学校・中学校共通

(3) 時間的制約について

授業の準備と校務分掌で余裕がないため、現在はクラブ活動のみで課外活動は行っ
ていない。吹奏楽にずっと親しんできたこともあり、吹奏楽をやりたいと思っ
ているが、仕事に追われ授業準備の時間も満足に取れない状況下で課外活動を始め
るのに踏み切れずにいる。効率的に仕事をこなしていけるようになれば、また変わ
て来るかと思う。

(4) 他の教員の理解や協力について

他の職員に理解されず、音楽部（個人的なものも含む）の思いが伝わらない。

(5) 保護者との関わりについて

保護者や地域とどの程度の関わりをもつべきか悩んでいる。
父母会などがあり、保護者やOBからのプレッシャーもある。

中学校のみ

(6) 指揮に関する課題

吹奏楽の経験はあっても全ての楽器を指導したり指揮することに不安がある。もっ
とクラブや楽団に入っておけばよかったと思う。また、楽団相手に指揮法を学ぶ経
験があれば良かったと思う。